

富山湾周辺地域の漁業用具の基礎的研究事業

和船建造技術を後世に伝える会

はじめに

当会は、廃絶が危惧される木造和船とその建造技術の記録・収集、及び調査・研究を通して和船とその建造技術、また和船にまつわる事象（歴史・習俗・漁撈・舟運等）について調査・研究し、後世に伝承していくことを目的に活動している。これまで、『船をつくる、つたえる』、『氷見の和船』、『とやまの和船』の3冊の調査報告書を刊行し、富山県でかつて用いられた和船についての調査成果の公開に努めてきた。

平成23年度、24年度は、富山湾周辺地域の漁業用具の基礎的研究ということで、和船のみに限定せず、広く富山湾沿岸地域で使用された漁業関係の資料（網漁関係用具、釣漁関係用具、磯漁関係用具、加工用具、信仰用具、操船関係用具、船舶関係用具、造船用具等）の基礎調査を目的とした。

（1）氷見市内と近隣地域に現存する漁業用具の現況把握と収集

石川県羽咋市柴垣町にて、木造のテンマと付属の船具、および磯漁関係の漁撈用具を収集し、資料保全のための簡易修繕を実施した。このテンマは、すでに当会が収集している石川県志賀町大島のテンマとほぼ同型のもので、野天に置かれていたため一部の部材が欠落していた。柴垣から大島にかけて、船の前後を逆にして、船首部で櫓を漕いで船尾部方向に進むという独特の使用方法が見られるが、今回収集したテンマもその典型である。過去に収集した2艘は、船外機を取り付けるための加工があったが、このテンマは完全な無動力船である。また、櫓を漕ぐための櫓杭を船首・船尾双方に備えた前2者に対し、櫓杭が船首部にしかなく、進行方向は船尾側に限られていたようである。

そのほか、旧富山県立有磯高校にて実習用に用いられた櫓と旧富山商船高等専門学校（富山高等専門学校）にて実習に用いられた櫓・櫓・マニラロープ等の寄贈を受け、収集した。

（2）富山湾周辺地域特有の「オモキを有する二枚棚構造」に関する調査・研究

富山湾周辺地域で用いられた、主にテントと称する二枚棚構造の木造船には、他地域にない特徴としてオモキという部材の存在があげられる。オモキは底板左右両端に組み込まれた厚板材で、半裁した丸太から削り出される。このオモキを有する二枚棚構造について、その分布範囲・実態について調査・研究を進めた。

（3）各博物館・資料館における漁業用具の収蔵・整理状況の把握・調査

新潟県三条市歴史民俗産業資料館（三条鍛冶職人と和釘・船釘）、神奈川県横須賀市自然・人文博物館（国指定重要有形民俗文化財「三浦半島の漁撈用具」）、沼津市戸田造船郷土資料博物館（洋式船「へダ号」の造船関連資料）、沼津市歴史民俗史料館（国指定重要有形民俗文化財「沼津内浦・静浦及び周辺地域の漁撈用具」）、知多市歴史民俗博物館（国指定重要有形民俗文化財「知多半島の漁撈用具」）、瀬戸

内海歴史民俗資料館（国指定重要有形民俗文化財「瀬戸内海及び周辺地域の漁撈用具」「瀬戸内海の船
図及び船大工用具」）の資料見学・調査を行った。

おわりに

現在、和船建造技術を後世に伝える会が所蔵している漁業関係資料については、順次整理作業を行い、それらの成果は、調査最終年度刊行予定の『和船建造技術を後世に伝える会調査報告書Ⅳ』の中で報告する計画である。今回が事業の2か年目ということになるが、富山県の漁業関係資料に限ってみても、クリーニングや燻蒸など未了の資料が多々ある。それらについては、今後の当会の活動のなかで活用に向けた整理作業を続けていきたいと考えている。

（文責 廣瀬 直樹）

調査写真



収集したテンマ

石川県羽咋市柴垣町で磯漁に用いられたテンマ。野天に置かれていたため、一部部材の欠落がみられた。



テンマの船内

船内でも一部部材が脱落しているのが確認される。



テンマの運搬作業

柴垣町の砂浜より搬出した。この後、資料保全のため、簡易的な修繕を施した。欠落した部材の後補の作業等は今後の課題である。

